

# 街の 灯り 物語

灯り——それは

そこに暮らしがある証

さまざまな心模様が描かれ

物語が紡がれている証

迎えてくれる灯り

見送ってくれる灯り

そして見守ってくれる灯り

街それぞれに灯りがあり

人それぞれに

心に残る灯りがある

その一つの物語



## レッスン帰りにいつも見た 夜道の灯り

西村由紀江 ピアニスト

叱られた帰り道  
灯りに励まされた遠い日…

ゆ

きえちゃんへタね」。小学生の頃、大阪の豊中市に住んでいた私は、学校が終わるとピアノの先生のお宅にレッスンに通

っていた。私はとても手が小さく、友だちには弾けても、私には弾けない曲がたくさんあった。「ダメね」へタね」。先生に叱られ、一人トボトボ帰る夜道に、ポツと灯りがともっている。住宅街に一軒だけある店の赤提灯。

子供にとって暗い夜道はそれでも心細く怖いのに、先生に叱られた日などは、「もうピアノなんかやめたい」って。でも、夜道にとまるその灯りは、「落ち込まなくていいよ、また明日もがんばろうよ」と優しく私に語りかけ、励ましてくれているようで、心が温かくなったのを覚えている。

そんな原風景があるせいかな、私にとって「灯り」は、ささやかだけど、ほっと心を和ませてくれる、ほのかな灯り。ただそこにあるだけなのに、温かい気持ちになれるもの。

音楽もそう。私がピアニストとして一番大切にして

いるのも、人の心に語りかけるような音楽。デビュー当初はうまく弾くことばかり考えていたし、少し自信がつくと音をたくさん並べて派手で華やかな曲をつくったりもした。でも今は、完璧に弾くよりも人の心に響くように、音をたくさん並べるのではなく、あえて少ない音で、一音一音が人の心に染み入るように、そんな音楽を目指している。

ピアニストである私にとって、身近な灯りはステージの照明。夕暮れのような赤や懐かしいセピア色の灯り、シンブルで音のイメージを広げるような照明を大切にしている。

コンサートに来られた方から、よく「励まされた」「心がやすらいだ」という言葉をいただく。歌詞のない私の音楽にそんな力があるのだとしたら、それは遠い日の、あの赤提灯が与えてくれたのかもしれない。

曜



にしむら ゆきえ ピアニスト・作曲家

1967年大阪府生まれ。3歳からピアノを始め、欧米、東南アジアへの演奏旅行に参加。近年は、年間60本を超えるコンサートのほか、ライフワークとして学校や病院でのコンサートも行う。また、NHK「アーカイブス」のテーマ曲を手がけるなど、ますます意欲的に活動中。心を包み込むサウンドは、同世代の女性からの支持も高い。

<http://www.nishimurayukie.com/>